

第14回

平日の

午後のコンサート

平日の午後のコンサート

7.2 (火) 14:00開演

東京オペラシティ コンサートホール

Tue. July 2, 2019, 14:00

at Tokyo Opera City Concert Hall

〈敬子 セタの夜へ2〉

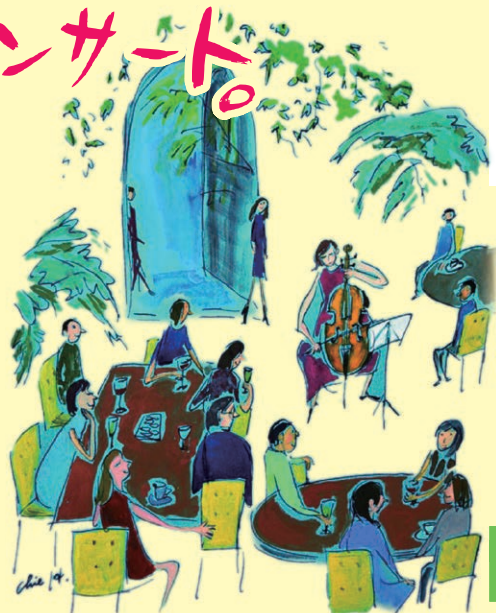
A Tanabata Evening with Keiko Mitsuhashi 2

指揮とお話 三ツ橋敬子

Keiko Mitsuhashi, conductor & speaker

コンサートマスター 近藤 薫

Kaoru Kondo, concertmaster



7/2

マイアベーア：歌劇『預言者』より“戴冠式行進曲” (約4分)

Meyerbeer: Coronation March from opera "Le Prophète" (ca. 4 min)

ホルスト：組曲『惑星』Op. 32 より

“火星—戦争をもたらす者” “木星—快楽をもたらす者” (約16分)

Holst: Mars (the Bringer of War), Jupiter (the Bringer of Jollity) from "The Planets" Op. 32 (ca. 16 min)

ポール・モーリア：オリーブの首飾り (約3分)

Paul Mauriat: El Bimbo (ca. 3 min)

ワーグナー：歌劇『ローエングリン』より“エルザの大聖堂への入場” (約6分)

Wagner: Elsa's Procession to the Cathedral from opera "Lohengrin" (ca. 6 min)

— 休憩 intermission (約15分) —

チャイコフスキー：バレエ組曲『白鳥の湖』Op. 20a より (約40分)

Tchaikovsky: Excerpts From Ballet Suites "The Swan Lake" Op. 20a (ca. 40 min)

主催：公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）|

独立行政法人 日本芸術文化振興会

Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan |

Japan Arts Council

本公演は新宿フィールドミュージアム関連イベントです。



イラスト：ハラダチエ

7.2

三ツ橋敬子 指揮とお話

Keiko Mitsuhashi, conductor & speaker

東京藝術大学及び同大学院を修了。ウィーン国立音楽大学とギジアーナ音楽院に留学。小澤征爾、小林研一郎、G. ジェルメッティ、E. アッツェル、H = M. シュナイト、湯浅勇治、松尾葉子、高階正光の各氏に師事。

2006年トスカーナ管弦楽団とのツアーを指揮してヨーロッパデビュー、2007年ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ交響楽団にてオペラデビューを果たした。2008年第10回アントニオ・ペドロッチ国際指揮者コンクールにて優勝。併せて聴衆賞、ペドロッチ協会賞を受賞し、最年少優勝で初の3冠に輝いた。2010年第9回アルトゥーロ・トスカニーニ国際指揮者コンクールにて女性初の受賞者として準優勝。併せて聴衆賞も獲得。

これまでに東京フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、大阪交響楽団、京都市交響楽団等と共演している。

2016年から、神奈川県立音楽堂にて「三ツ橋敬子の夏休みオーケストラ!」がスタート、本年も8月に第4回目を開催。子供たちへ多彩な音楽体験を届ける企画内容が好評を得ている。



©大杉隼平

プログラム・ノート

解説＝柴田 克彦

7.2

吹奏楽でもおなじみの名曲を華麗なオーケストラ・サウンドで

今回の「平日の午後のコンサート」は「敬子、七夕の夜へ2」。当シリーズではおなじみの指揮者、三ツ橋敬子が、昨年7月に続いて多彩な名曲を聴かせます。

プログラムには様々な国の有名曲が並んでいますが、実は共通点が1つあります。それは、どれも吹奏楽で人気の楽曲であること。『惑星』の2曲や“エルザの大聖堂への入場”は1960年代、『白鳥の湖』は1980年代から、コンクールを含めた吹奏楽の定番曲になっていますし、「戴冠式行進曲」と「オリブの首飾り」もしばしば演奏されています。中でも“エルザの大聖堂への入場（吹奏楽では「行列」の表記が通例）”が古典的な存在であることは、吹奏楽経験者には周知の事実です。

そしてそれは、各曲が吹奏楽に合ったテイスト、すなわち華麗さ壮麗さや色彩的なサウンドを有していることの表れといえるでしょう。今回は、三ツ橋敬子の躍動的なタクトで紡がれる明快かつダイナミックな音楽が、万人を魅了するに違いありません。



楽しいお話でも人気を博すマエストロ、三ツ橋敬子

©上野隆文

7.2

ヴェルディの“凱旋行進曲”の 先駆けともいえるマイアベーアの代表作

幕開けは、ジャコモ・マイアベーア(1791-1864)の歌劇『預言者』より“戴冠式行進曲”。マイアベーアは、パリを中心に活躍したドイツ出身のオペラ作曲家。『ユグノー教徒』などで大成功を収め、フランス流「グランド・オペラ」の確立者として多大な名声を博しましたが、没後は評価を下げました。『預言者』は、1849年パリで初演された全5幕のグランド・オペラ。16世紀オランダにおける再洗礼派(急進的なプロテスタントの一派)の反乱に基づく内容で、預言者と称して反乱軍の首領となるヨハンの苦悩や勝利に恋愛が絡んだ悲劇です。

“戴冠式行進曲”は、一時反乱に成功したヨハンが、ミュンスター大聖堂で戴冠式を行う第4幕第2場の音楽。堂々たる第1の主題で始まり、(オペラでは)舞台上のトランペットと全合奏の応答を経て、流麗な第2の主題が登場。これらを軸に進行し、壮麗な盛り上がりを見せます。今やマイアベーアの代表作たるこの曲は、ヴェルディの歌劇『アイダ』の“凱旋行進曲”の先駆けとも称されています。

きらびやかなサウンドと美しい旋律 日本でも大人気の『惑星』から2曲

おつぎは、近代イギリスの作曲家グスターヴ・ホルスト(1874-1934)の組曲『惑星』より“火星”“木星”。『惑星』は、占星術への興味を発端に、主として1914〜16年＝第1次世界大戦の最中に作曲され、数曲単位での初演後、1920年ロンドンで全曲の初演が成されました。初演当時の好評とは裏腹に一時忘れられかけましたが、1960年代にカラヤン指揮／ウィーン・フィルの録音が出て急浮上。宇宙時代と連動して世界的なヒット作となり、オーケストラの機能性を生かしたスペクタクルな音楽は、高い人気を獲得しました。

全体は、7つの惑星が地球から近い順に並べられ、神話に由来する神の名が付されています。今回演奏されるのは特に有名な2曲。

“火星―戦争をもたらす者”は、5/4拍子の重いリズムが執拗に繰り返される中、性格の異なる3つの主題が登場し、圧倒的な迫力と緊迫感を湛えた音楽が展開されます。

“木星―快樂をもたらす者”は、大規模で変化に富んだ1曲。4つの主題に基づく喜びに充ちた音楽で、6本のホルンが主導する豊麗・芳醇なサウンドが特徴を成しています。さらに中間部の流麗な旋律は歌としても愛されており、日本では平原綾香が「ジュピター」の題でヒットさせました。

手品のバックミュージックといえばこれ！

ここで気分を変えて、ポール・モーリア(1925-2006)の「オリーブの首飾り」が演奏されます。手品でおなじみのこの曲、実はクロード・モルガンという人が作曲し、彼のグループ「ピンボー・ジェット」が「嘆きのピンボー」の題でリリースしたディスコ・ナンバー。それを、フランスのイージー・リスニング界の大家ポール・モーリアが、ムード音楽風にアレンジ(1975年にシングル盤をリリース)してヒットさせました。つまりカバー曲が原曲を凌駕した一例です。このメロディアスで歯切れ良い音楽は、レコード発売直後に女性奇術師・松旭斎すみえがステージで使用して以来、手品のバックミュージックとして普及しました。



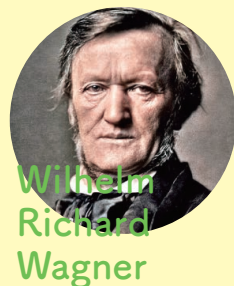
きらびやかな音楽とともに、七夕の夜に思いを馳せて

7.2

吹奏楽では大定番の曲を
貴重なオーケストラ演奏で

前半最後は、ドイツ・ロマン派オペラの巨匠リヒャルト・ワーグナー（1813–1883）の歌劇『ローエングリン』より“エルザの大聖堂への入場”。『ローエングリン』は、1846～48年に作曲され、1850年にワイマールで初演された全3幕のオペラです。物語は10世紀のアントワープが舞台。弟殺しの汚名をきせられたエルザ姫と、窮地を救いに現れた聖杯の騎士ローエングリンが結ばれるも、彼が課した「素性を尋ねてはならない」との禁を姫が破ったため別れに至ります。

“エルザの大聖堂への入場”は、エルザとローエングリンが結婚式のためにアントワープ城内から教会へ進んでいく第2幕後半の音楽を凝縮したもの。元タリスト編曲のピアノ版が存在していましたが、ルシアン・カイエの編曲版で吹奏楽界に浸透し、大定番となりました。ただし当部分のみのオーケストラ演奏は減多にないので、今回は貴重な機会といえるでしょう。曲は、清らかな木管のフレーズに始まり、徐々に高揚。感動の度合いを増しながら、壮大な終結に至ります。



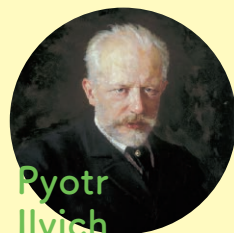
Wilhelm
Richard
Wagner



物語の舞台となるアントワープのスヘルデ河畔とステーン城

チャイコフスキー三大バレエの第1作にして
バレエ音楽の代表作

後半は、ロシア最大の作曲家ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840–1893）のバレエ組曲『白鳥の湖』より。作曲者の三大バレエの第1作にして、同ジャンルの大看板となったロマンティックな音楽です。比較的初期



Pyotr
Ilyich
Tchaikovsky

の1875～76年にモスクワのボリショイ劇場の依頼で書かれましたが、1877年の初演は全くの不評（主な原因は振付けと踊り）。しかしチャイコフスキー没後の1895年、名振付師プティパと助手のイワノフが振付けを改訂して蘇演したのを機に広く普及していきました。物語は、ジークフリート王子が悪魔によって白鳥の姿にされたオデット姫を愛し、悪魔とその娘の黒鳥に嵌められながらも、天上で彼女と結ばれる……といった民話や伝説に基づく内容。ただし構成は舞台によって異なり、結末にも複数のパターンがあります。

全曲は約2時間半を要するため、コンサートでは抜粋して演奏されるケースがほとんど。今回は以下の9曲が披露されます。

1. **情景** 第2幕冒頭の哀愁を帯びた音楽。オーボエが「白鳥の主題」を歌う、本作の代名詞的な1曲です。
2. **ワルツ** 第1幕の群舞における、優雅でスケールの大きなワルツ。
3. **白鳥たちの踊り** 「4羽の白鳥の踊り」の題でも知られる、第2幕の軽妙な音楽。
4. **情景** 舞台でも前曲に続く王子とオデットの愛の踊り。ハープ、ヴァイオリン、チェロのソロが際立った、ロマンティック極まりない音楽です。
5. **チャルダッシュ：ハンガリーの踊り** 以下の3曲は第3幕で披露される民族舞曲です。まずは、哀愁漂う緩徐部分から明るい快速部分に移る情熱的なナンバー。
6. **スペインの踊り** カスタネットを加えたエキゾチックな音楽。
7. **ナポリの踊り** コルネットのソロで知られる陽気なナンバー。
8. **マズルカ** 力強く弾むポーランド舞曲。
9. **終曲** 切迫感を漂わせた「白鳥の主題」を中心に激しい展開を遂げる、壮大なラストシーン。

しばた・かつひこ（音楽ライター）／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」（朝日新書）。